

幌向湿原晩秋の吟遊俳句会

全三十一句と短評

《総評》

自然を散策する吟行句会では花鳥諷詠を詠うことが多い。今回の吟遊俳句会も形は同じだが、目的は湿原再生に向けた取組への参加と、文芸としてどう捉えられるか探る句会でした。結果は詠草のとおり共鳴する句が沢山揃いました。

湿原と再生、風土の自然や農業、協賛する馬頭琴演奏会等々、興味を持って皆さんが参加されたので、目的意識を持った吟行句会の意義を確認することが出来ました。

俳句初心の方も多く、推敲の余地ある句もありますが、伝えたいことは明らかにされています。佳句も多くあります。再度、鑑賞してみてください。拙い指導ですが少しだけ手を入れましたので参考として下さい。どれも伸びしろの有る句ばかりですから、この後もどうぞ句作を続けてください。皆様ありがとうございました。

句会進行 藤田ひろし

寒風にミズグケ栄え冬をまつ まこと

季重ねの解消「水苔の生きるは盛ん冬来たり」

湿原に命を託しアキアカネ まこと

「し」で切ることで湿原に託すのは我々人間も。簡潔ながら深い表現

秋深し集い歩くは湿原の海 うくむら

「は」は説明になる。「秋深し集いて歩く湿原の海」

紅葉の海わたる風人の列 うくむら

全景を良く見られています。整理して「紅葉の木道わたる人」より俳句らしくなります

湿原や歴史を語る隅の秋 よりこ

「隅の秋」が難しい。「湿原や太古の歴史語る秋」

再生地来るといいなタンチョウも いわお

祈りも込めて湿原再生を平易に詠う。

「丹頂も来るかと湿原再生す」を用意してみたが、原句の方が訴えは大きい

鳥渡る武四郎が見し山遠く あきお

来道(蝦夷地)六回の松浦武四郎。来し方行く末を見やる姿に、季語「鳥渡る」が見事に決まります

湿原にモンゴルの風聴く馬頭琴 あきお

草原のイメージを幌向に置き換えて、中七音はまもりた。 「モンゴルの風湿原に聴く馬頭琴」

秋の野に七草想い再生す ともこ

七草と再生の関係が分かりにくいので 「秋の野に幌向七草あればこそ」情緒的ですが

あきあかね我を追いかけ頭上舞ふ ともこ

皆が体験した実景と実感でした

冬枯れの田んぼにしかと命の芽 たけお

ものの命はこうして繋がる。写生かつ心象の句

よし原のうねりを鳴らす冬の風 ひさなお

草木の動きと音で冬がうまく捉えられている

枯れススキ秋の終わりの独りごち ひさなお

季重ね解消「枯れススキ君も居らずに独りごち」あるいは「会の終わりの独りごち」なども

枯葉中むらさき野菊そつとさき けいこ

楚々とした秋らしさを優しく表現される

晩秋にみどりのビートあざやかに けいこ

ビートの生命力をあざやかに切り取る

秘めごとを苔の緑に含ませる とくこ

苔のしっとり感が云い得て妙、秘めごとを沢山含んでいることだろう

其れは何処ホロムイスゲの影を追うとくこ

ホロムイスゲに託して湿原の再生を祈る具体性がよい

ヨシの穂を揺らせて響く馬頭琴 あきら

ヨシの穂を揺らすのはあたかも馬頭琴の音の波、詩情豊かな秋の句

学舎に原野を使う秋の頃 そつきち

面白い視点なのでもう少し分かり易く 「木虫水(きむし・みず)秋の原野に学びけり」

風駆ける栄枯湿地に秋思ふ そつきち

「栄枯」を活かしたい、中七音も守りたい 「開拓の栄枯の湿地秋思う」

山粧う野山の錦我忘れ すみこ

「山」と「山」の重ねが勿体ないので 「山粧う錦の綾に包まるる」

秋思・冬隣にいてつくしむ すみこ

明らかな季重ねは解消したい 「冬隣り水苔を手につくしむ」

幌向の土地の記憶を渡る雁 かずお

雁に託して幌向を愛する気持を表出

秋の日にとんぼ天国祈ります かずお

「祈ります」が曖昧なので

「秋の日やとんぼ天国かがやかす」

秋風や雁の声さそう幌向路 トモコ

中七音は守りたい。「秋風や雁鳴き誘う幌向路」

水苔のみどりしずかに秋想う トモコ

水苔のしっとり感が誘う秋の憂いです

湿原にのど歌ひびき空高く 長一郎

のど歌のひびきによる素晴らしい演奏を皆さんと共有しました

秋の野に白馬伝説馬頭琴 スミコ

爽籟や湿地かすかに鼓動せり

幌向の水苔次代に枯れやらす ひろし

喉歌や吾彼突き抜け天高し

喉歌や吾彼突き抜け天高し

とても寒い中での俳句会にご参加下さった皆さま、短時間の吟行にもかかわらず投句して下さい下さった18名の方々、ありがとうございました。俳句初心者一人として、季重なり、中七の字余り、説明過剰、感情表現過多など、「多過ぎ」のない作句に難しさを覚えます。俳句の型を守りつつ、読み手がハッとさせる1枚の絵のような一句を、次回のふらっと南幌句会でも披露し合ひましょう。 披講担当 スミコ